

巻頭言

学部2年生向けに「天文学」という講義を行っている。兵庫県立大学は大きな大学ではないので、ひとりで惑星も恒星も銀河も話さなければならない。初回の授業では「夜空に見える星の大半は恒星だけれど、惑星や、時には彗星、流星も見ることができる」ということ言う。「恒星は自ら輝く天体で、惑星は(少なくとも可視光では)恒星の光を反射して見える天体だ」。こんな話をしていると一部の学生は「なんて当たり前のことを言っているんだ」という表情をする。

3回目の授業では黒体放射の話をする。「放射が最も強い波長は物体の温度によって変わる。なので青い恒星は温度が高く、赤い恒星は温度が低いんだね」。こういう説明をすると、授業の最後に書いてもらう「今日の授業で分からなかったこと」の紙に「火星が赤く見えるのは温度が低いからですか?」と書く学生が、毎年必ずいる。おいおい、それじゃあ青く見える海王星は温度が高いとでも思うのかね?

自分が話したことの何分の一しか学生には理解してもらえない。しかし、自分は授業が下手だと思っただけで大学に勤めるのがしんどくなるので、こう考えることにした。「自分だって学生の時には授業をろくに聞いていなかったじゃあないか」。たしかに、舩添さんの授業で記憶に残っていることは、赤いバラの自分の本を宣伝していたことだけだ。もしくは「一生懸命聞いても、量子力学IIはさっぱり理解できなかったじゃあないか」。たしかに、井戸型ポテンシャル以降は意味も分からず記号をノートに写していただけだった。

つまり、多くの人にとって、恒星と惑星の違いはあやふやなのだろう。日本惑星科学会と日本天文学会の二つがあることは知らないし、遊星人と天文月報があることも知らない。宇宙を研究している人は夜空に見える星のことを全て知っている、と考えているのだろう。私は以前は地球惑星科学科にいたし、現在は天文台に勤めている。惑星科学と天文学のかけはしのような役割を果たしていければ、と思う。

伊藤 洋一(兵庫県立大学 自然・環境科学研究所 天文科学センター)